

「ロゴロ通信第78号 14/10/25 日本ワヤン協会

ジャワは思つた以上にいい気候の島である。その気になれば春夏秋という季節感は味わうことができる。そして冬がない。寒さが感じられるときはあるが、冬というほどの代物ではない。厳冬がいよいよ私たちの周りにやつてきた。どうか日々に気をつけられますように。

今年インドネシアは4月総選挙、7月大統領選挙、10月大統領就任式という行事のため、政府主催集会のすべてが10月初旬まで中止になつた。そのためジョクジカルタ特別州政府文化局主催だつた8月のインドネシア語版「満月の夜のリムブ」上演も、中止。結局私たちの11月の日暮里サニーホール上演が先になつた。

古い話だが、2000年夏日本ワヤン協会招聘のキ・マンタップ・スダルソノ一行が来日した。その一日調布駅前のホールでの公演直前、少々時間余りとなつて、キ・マンタップは途中駅近くの拙宅で2時間ほどをシンデン二名とともに過ごすことになつた。この時私は、ビモの代わりにリムブが生命の水を探しに行く「デウォ・ルチ」下敷きの「満月の夜のリムブ」VHSを、臆面もなく名ダランに見てもらつことにした。20分ほどだつた。ダランはケラケラ笑つていた。その後ジャワでの上演のさい、キ・マンタップはリムブが登場すると、日本じやリムブはビモに代わり生命の水を探しに行くんだと面白おかしく紹介していたそうな。（松本亮）

◎ 本号では、日本ワヤン協会創立40周年に因んで、比較的最近本協会上演でワヤンを遣つた4人のダラン（いろんな解釈があるが今日ジャワでは人形を遣う人を気楽にダランという）に原稿を依頼した。以下に並列した。テーマは創立40周年での感想ということであつた。

シユツ ルップ ドトピトノは、魔法の言葉

松本和枝

シユツ SWUHとは、一瞬にして粉々に碎け散ること。

ルップ REPとは、静まる、または止まる。

ドトピトノ DATAPITANAとは、DATATITA、それから、つづいて、または前の物語を止めて変わつて新しい物語を語れ。

一晩のワヤンのダランの初発の声は、いろいろあるがこれが多。重々しく呪文のようにシユールップ/ドトピトノと始める人。自分に向けてつぶやいているのか?というほど軽く小さくささやく人など。

なぜ始めが破壊なのか?大戦争、災害、ビックバン、物語の始めにもう壊れてしまつているのか?

ルップには、日が沈む、終了する。の意味もある。大騒ぎのあと、静寂かも。ドトピトノの最後のAは、どうかあれかし、どうぞありたまえ、どうか新たに語られよ。新たに整えよの意味だ、とも教わった。

破壊・静寂・新たに語れ、簡単に言えば「さて物語は変わつて」なのだが、日本ワヤン協会のワヤンを見る人はジャワ語と格闘することなく日本語で楽しむことができる。三十年前には翻訳され、その後ずっと今も上演されつづけているからだ。なぜ続いてきたかといえば、今ではワヤンジュパンと名付けられた創作に力を注いできたからである。おもいつくままになんと四十年にもなり、その影響か全く関係ないか、今や日本にワヤンを上演するグループがいくつもある。

きっと今日もぐいっと生命の木グヌンガンを引き抜いて、シユールップ/ドトピトノと語りだし、新しい生命の誕生を言祝ぎ、そつとあらたなグヌンガンを中心にして直しているのだろう。

ワヤン協会40周年に寄せて

1992年に東京小笠原会館というところで、「神と魅の面差し」というタイトルでインドネシアの仮面と影絵人形の展示会が開催されたことがありました。それに付随して松本亮先生と、横浜ボートシアターの遠藤琢郎氏がパネラーのシンポジウムが開かれて、当時、ワヤン協会の公演を追いかけていた私は、もちろんいそいそと聞きにいったのでした。

日本における文化財保護法の功罪の話、インドネシアにはそういう枷がない故に、常に自由に芸能の形は進化し流転し続けていくこと。例えば、その流れ変化していく中に、あまりにも美しい形が作り出されたとしても、それは残ることなく変わっていくこと。。。そして、後日別の機会にそのシンポジウムについてお話をしていた時の松本先生の言葉も、常に一緒に思い出します。「でも、ここ『日本』にひとつ一つの形が切り取られているでしょう」

つい先日のことでも記憶が曖昧になってしまふ私ですが、その時の話は、今でもはっきり覚えています。そして、今しみじみ改めて思い返し、ちょっと寂しいような気持ちとともに、日本に美しいひとつの形のワヤンを持ってきてくださった松本先生と、40年のワヤン協会の月日に改めて感謝を捧げたい私です。

(西山 裕美)

ダランと呼ばれることの困難

中辻 正

民族・共同体の文化・歴史を背負つて発展して来た民俗芸能と呼ばれるものは、長い間にわたつて育まれたその様式のうちに、共同体固有の精神性、哲学、世界観を溶かし込んで成立する。それは、外部の者にとつては非合理的であつたり、場合によつては狂氣じみた印象すら感じさせることもあるかもしれない。ことにジャワ文化は、その真意を韜晦し、婉曲に表現することに特化した文化である。彼らのつくりだしたワヤンに内包される物語、哲学、教訓は高度に洗練されているが、それゆえに、その文化の外に身を置く者にとって、安易な分析、批評をゆるさないものがある。

さらに厄介なのは、ワヤン・クリの語りが、基本的に即興であることだ。松本亮の著作にあるように、一晩を費やして語られる物語とその言葉は、ダランの口をついてこの世界に現れ出るやただちに夜の闇の中に溶け込み、二度と再び同じ姿で現れることはない。ダランは固定詞章を記憶してそれを再生するレコードとしての語り部ではなく、ある意味即時に物語を創り出す創作者としての語り部でもあるともいえる。

ただここで見誤つてはならないことがある。この創作活動は発信者（ダラン）からの一方通行的なものではなく、その双方向性は、われわれが一般的に考える表現者の発信レベルにおけるフィードバック作用の比ではないということだ。ワヤンとその表現者たるダランは、過去においては王権に、そして現在においては大衆と時の権力に直接対峙し、表現者自らが発した言葉はたちに王権・大衆からの批評にさらされることになる（近時においてはスカルノ治下における9月30日事件に関連して多数の肅正があり、ダランもその対象となつたと伝えられる）。それら観衆からの反応は、ダランの経済生活のみならず、場合によつては直接にその命をも脅かすほどのものであり、ダランはその置かれる時勢によつては文字通り命がけで、上演にのぞむのである。

ダランの語りの即興的要素は、登場人物のせりふや地語りの細部はいうにおよばず、物語の大枠のプロットに対する独自解釈にもおよぶが、それが観衆に認知されるには、厳しい批評眼に耐えうる理論武装を要するのであり、ブツキシユな典拠を用意し、そのプロットの採用について十全な根拠を提出できるだけの準備が必須なのである。気まぐれや思いつきのレベルでの安易な変更は許されない。政治的迎合や、利権に益するだけの軽々しい上演を行えば、ダランは見識高い批評者から「文化の破壊者」として糾弾されるにいたるし、権力からの圧力に全面的に対抗しようとすれば、それこそ命が危ない。ダランたちはそれら観衆との間で丁々発止と切磋琢磨を繰り返し、今日まで生き残ってきたのである。「真正のダラン Dalang Sejati」とはそれらすべてに対応し、なおかつ共同体の世界観を牽引する力量と見識をそなえた者にのみあたえられる称号なのである。

こうした上演現場における双方向的研鑽が今日のワヤンの物語のプロットを形成してきた。それはヒンドゥーからイスラム化への変遷を通じて、源泉となつたインドの古代叙事詩から時には大きく逸脱したジャワ固有の解釈をはぐくみ、様々な異聞・リージョンスタイルを生み出し、チャランガンやスマパランと呼ばれるファンファイクション的演目や、ジャワ固有の土着的信仰と深いつながりをもつ演目をも生み出した。こうしてジャワ文化の共同体がそれこそ、その血と肉を献じて生み出して来た演目群、そのそれぞれの持つ内的必然性、存在意義、そしてそれらが照らし出す未来への展望、その全てを一身に自家薬籠中のものとし、なおかつ自身の信じる未来を提示しつづけること。その覚悟がない者がダランになることなど許されるべきものではない。本来「ダランである」ということは、それほど困難なことなのである。

もう、そんなですか

大和田 尚

ワヤン協会が、四〇周年だそうです。

私はその年月全部を知っているわけではなくて、その四分の三ぐらいのほんの短い間のことしか知りません（テヘツ）。

・・・そもそも出会いは小泉文夫さんがFM放送でやっていた民族音楽の時間でした。そこでなにか気に入ったのがガムランで、また当時の機械ではその音をならすのが難しく、オーディオマニアを自称していた私は何とかこれをいい音で聴いてやろうと、苦労しておりました。そんなこんなをするウチに出会ったのが平凡社のカラー新書の一冊『ワヤン』でした。まあきれいなもんだなあと見ていたのですが、誰からでしたか「ガムラン音楽の最高のものは、ワヤンの伴奏である」といわれたんです。それは是非聴いてみたいもんだと思いながらも機会にあわずそのままになつていましたが、なんと友だちの妹さんがインドネシア好きで、ワヤンの会があるのも知っていました。

そこではじめて松本さんを見た（まだ会ってない）んですが、不思議なことをしていました。テープ（オーブンリールという大きな機械を使う）を回しつぱなしにしながら、日本語のセリフをカセットをつけたり消したりしながら音出ししているのです。はは、少しでも臨場感を出すために大変なことをしてゐるな、と感心しきりでした。話もすこぶる面白かったので、二回三回とかよううちに、それにしてもあまりにへんだ、観客にあの苦労が伝わっていない、と不思議さは募るばかり、とうとう「あのう」と声をかけてしまいました。そしたらなんと録音テープに後から音を入れる方法を知らなかつたんですつて。「え～つ、そんな～」つていつたら、「あなたやつてください」つていわれて、それからはず～つと、ず～つと、音響担当やつてます。カセットテープに入っている音楽を切つたり張つたりして音を調整し、それにアフレコで入れた日本語のセリフを配置して聞きやすいように音量その他を整えて本番テープを作るわけです。自慢じゃないけど日本で五本の指に（ほかに誰かいるとも思えませんが）入ります。

ワヤン協会で扱う素材はすべて三〇年四〇年前の名演です。それに息を吹き込んで鑑賞に堪えるものにし、それを見る形にする、これはすごいことです。今のインドネシアでは誰もやっていません。諸外国にも見当たりません。日本だけです。それを見られるのも、ましてや作れるのも楽しいことです。もういまではジャワでもかなり変わつてしまつたワヤンが日本にだけ生き残つているのです。そう考へるとチョッピリ胸を張れる三十年だったかなあと、独りごちる私なのでした。